

IS異聞帯

銭湯妖精 島風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色々と改変してるから最早、原作の要素薄いかも知れない異聞帯

作者の趣味全開で書いていますので、内容の保証はしかねます

十中八九、誤字脱字や文字揺れが多発していると思いますが、お許しください

タグは、なんとなく付けておきます

目標は1頁2000文字前後

試験的に空き時間で少量ずつ書いてツギハギしています

目次

痛い話	1
痛い話のち	5
仮	9

痛い話

地平の彼方から陽が上がり空を焼く暁、ほのかに赤く色づく澄んだ空に幾つもの軌跡が描かれる

白銀と白が舞う様に攻防を繰り返し、激しい火花を散らす

「箒！」

「応」

白が白銀を抑え込み紅へ合図を送ると紅は短く返答し刃を振るう、しかし 白銀は紙一重で紅の刃を躲し白と紅から距離を開け反撃を開始する

「ちっ……うざったいな、ほんと」

白は己の唯一の武装である大盾を紅を背に庇い構え白銀の弾雨を防ぎながら面倒臭そうに言う

「一夏、もう一度頼む」

「OK、任せろ相棒」

紅の頼みを白はニツと笑み了承を告げ

「ラウラ、牽制行けるよな？」

「無論問題ない、だが そろそろ位置がバレる、支援砲撃を命中させられる可能性が高いのは次が最後だ」

「だ、そうだ。みんな聞いてたな？ 仕留めるチャンスは次が最後だ、行くぞ」

白は黒の言葉を聞き指示を出すと、仲間達からの返事が聞こえ行動が開始される

再び激しい攻防が繰り返され幾重もの軌跡が空へ描かれ、火花を散らし長くも短い時間が経った頃

「捕まえた、今度こそ逃さねえ・・・箒、私ごとやれ」

「貫通しない事を祈ってくれ一夏」

紅の突き出す光の刃が白銀に突き刺さり・・・



「・・・あー・・・おん？」

軽く頭痛を感じながら目を開けて周りを見て首を回して溜息を吐き自分の置かれている状況を確認する

変な夢を見た様な気がして正直気分は最悪だが、後ろ手に縛られていて身動きが出来ないので、更に気分が悪くなる

「あーそうだ、姉さんの決勝見に行く途中で誘拐されたんだっけか」

ウチは確かに そこの一般家庭に比べたら裕福な分類だろうけど身代金目的なら選択を間違えてると思う

だとしたら、何が目的なんだ？

そんな事を考えつつ何とか脱出出来ないか模索する

ひとまず私の見える範囲では見張りは居ないし、かなり動いて音が漏れている筈なのに見にこないって事は近くに居ないか、近くに居るが余程 逃げられない自信があるのか・・・よく分かんないな

ひとまず手錠の鎖が鉄骨を通してあって動けない

「あークソ・・・早くしないと決勝始まるしなあ・・・外すしかないかあ？」

正直、やりたくは無いい、やりたくは無いが救助がいつ来るか分からない以上は、やるしか無い

でも物凄く痛い思いをする事になる、だって手の関節を無理矢理外して手錠から手を抜くのだから

外した関節を嵌めるのもかなり痛い思いをする事になるから、本当はやりたくない

「あー・・・せめて携帯使えたらなあ」

身体を振ったりしてポケットを探ったりしてみたが、誘拐犯に盗られた様で存在を感じなかった

「はあ・・・腹括るか・・・」

私は深呼吸して歯を食い縛り無理矢理 利き手とは逆の手の関節を外して手錠を外し深く息を吐く

「クソが、クソ痛え・・・あー血も出てるし・・・」

幸い手錠の鎖は鉄骨を回して有っただけだったので悪態を吐きながら立ち上がり辺りを警戒しながら再び深呼吸をして外した手の関節を嵌め直し、深く息を吐いて、今すぐに目の前の廃材を蹴飛ばしたい衝動を我慢し

「んじゃ、逃げますかねっと」

滅茶苦茶 痛い右手を庇いつつ足音を出来るだけ立てない様に出口を目指して進み、出入り口を探ると 1人分男の話し声が聞こえる

そーつと扉の隙間から覗くと、目出し帽を被って見覚えの有る携帯で電話をしている男が1人見える

「・・・私の携帯を勝手に使ってやがるわ・・・誰と話してんだろ？」

身代金目的なら両親なんだろうし、私の身体・・・臓器とかならわざわざ私の携帯を使う必要は無いわけで・・・まさか、姉さん？

もしかして姉さんに八百長しろって脅迫する為に私を誘拐した、と？

そんなクソみたいな理由で私は誘拐されて、こんな痛い思いをするのか？

とはいえ、感情に任せて電話してる誘拐犯を殴りに行っても失敗するリスクが高い、何とか隙を見つけて奇襲するしかない、と腹を決めて誘拐犯の隙を窺う

それはそれとして、姉さんが八百長をする訳ない、八百長をするぐらいなら棄権するだろうし？

ん？ アレ？ ちよつと待てよ？ 私が誘拐されているって事はマドカも？ 可能性は有る、あるけどマドカの歳を考えると両親と一緒にいるだろうから誘拐されてない可能性も有る

まあ姉さん以外 全員 誘拐されていたら、その限りでは無いけどそれから暫く誘拐犯の隙を伺っていると、舌打ちして通話を切り溜息を吐いて近くのドラム缶の上に携帯を置いてポヤク

誘拐犯の様子を見る限り、交渉は上手くいかなかったのかも知れない

とりあえず誘拐犯はイライラし過ぎて此方に気付いて居ない様なので、そつと扉を開き足音を出来るだけ消して誘拐犯に忍び寄り背後からチョークスリーパーをかまして落とす誘拐犯を探して手錠の鍵を回収、手錠を外した後に誘拐犯に手錠をかける

これで時間稼ぎぐらいにはなる筈だ

あとは拳銃とかもバラバラに分解して地面にばら撒いて置き、自分の持ち物を回収しておく

「とりあえず第1段回は終了か？ んじやさつさと帰りますかね」

誘拐犯を全力で蹴りたい衝動に駆られたが我慢して逃走を開始する

まずは隠れて現在位置を確認して逃走経路を決めなきやな、うん

痛い話のち

ひとまず監禁場所から脱出した私は辺りを見渡してみると、此処は廃倉庫が並ぶ埠頭の様であり隠れるのに適していないみたいなので溜息を吐き、隠れないよりはマシだろうと、足早に移動しながら隠れる場所を探して適当な場所に身を潜め携帯を開いて、頼れる歳上の幼馴染へメールを送信する

彼女ならば私からのメール1通だけで場所を特定してくれる筈だ、願わくば姉さんの専用機の調整が終わって手が空いている事を祈るばかりだ

「痛うつ・・・痛え・・・あ、やべえ」

無理して怪我をしている右手がズキズキ痛むので悪態をついて不意に右手を見ると、まだ血が流れていて地面に垂れている事に気付く。誘拐犯が1人なら追ってくる可能性は低いが、複数人だったら血痕を辿ってこられる可能性もある、そう思い安物だが気に入っていたハンカチで右手を止血して、再び移動を始める

それから30分程して、丁度良い隠れ場所を見つけ隠れていると不意に携帯が震え着信を知らせてきたので携帯に表示された名前を確認してから電話を取ると

「やあやお待たせ、ちーちゃん を落ち着かせるのに手間取ってさあく誘拐犯はもう処理して、今そっちに向かっているから待っててねえ〜」

と頼れる歳上の幼馴染は、言いたい事を言って返事を聞かす話に通話を切る

まあいつもの事だし、なんかキレ気味っぽかったから特別触らないでおこう、普段は愉快なお姉ちゃんんだけど、怒ると滅茶苦茶怖い

んだよなあ東さん

まあそれから特に何もなく、私は迎えにきた東さんと共に病院へ向かい右手の治療をしてもらい、右手の状態を医者の方に説明して貰ったが、ドイツ語でぜんぜん分からなかったので東さんに通訳してもらった結果

右手の親指とかいろんな関節が脱臼して無理矢理嵌めた結果、筋やら傷付いていて擦過傷やらなんやらもあるから、暫く安静にしろじやないと傷痕残るぞ 的な感じらしい

まあ痛いし暫くは大人しくしよう、そうしよう

処置室から出て隣に立つ東さんに

「ありがと東さん、助かった」

「ううん気にしないで？」

私より少し背の高い東さんは私の頭を撫でて笑み言い

「無傷とはいかなかったけど、無事で良かった」

そう言つて東さんは私を優しく抱きしめる、東さんは優しい人だ

普段は愉快なお姉ちゃんやんで怒ると怖いのが、私を妹の様に可愛がつてくれている頼れる姉貴分

世紀の大天才であり、齡21歳でありながら一生遊んで暮らせる財産を築いた人、それがISの産みの親 篠ノ之 束と言う人

それなりに長い付き合いだが、東さんは何とか掴み所が無い気がない

そんな訳でドイツの警察の人に事情聴取されたけど、やっぱりドイツ語がサッパリだったので東さんに通訳して貰ったりして乗り越えたが、結局 決勝戦に間に合う訳もなく、姉さんの勇姿を見れなくて残念だった

そんなこんなで束さんと共に宿泊先のホテルへ戻り宿泊している部屋へ入ると、めっちゃ怖い表情で仁王立ちしている姉さんと、ソファに座る両親、ベッドでスヨスヨ寝てる妹が見えた

「た、ただいま？」

姉さんの覇気に少しビビりながら言う

「・・・お帰り、一夏」

と滅茶苦茶 低い声で返答してくる、めっちゃ怖いんですけど、マジで

「お待たせ ちーちゃん、不届き者は片付けてきたし、いーちゃん も無傷とはいかなかったけど無事だよ」

「ここにこにー」と束さんはいつもの笑みを浮かべ姉さんへ言う

「・・・そうか、分かった・・・少し頭を冷やしてくる」

「いってらっしゃーい」

阿修羅の様なオーラを纏った姉さんは そう言い私の頭を軽く撫でてから部屋を出てゆく

「おかえり一夏、無事で良かった」

「ただいま父さん、心配かけて ごめん母さん」

私の顔を見てホッとした様な表情をしている両親に謝ると、2人は立ち上がり私を抱きしめ頭を撫でてくる

「貴女が悪い訳ではないわ一夏、無事で良かった」

と母さんが泣きそうな声で言う

私は恵まれている、尊敬する両親と偉大な姉、可愛い妹がいて幸せだと思う

ひとまず誘拐されたのがマドカではなく私で良かった、でなければ今頃 私と姉さんは殺人犯になっていたかも知れない

私もだが姉さんもマドカに かなり甘いのだ、マドカが害されれば迷わずに報復する

それに束さんが姉さんを宥めてくれて良かった、じゃなかったら姉

さんの事だから決勝戦を棄権してIS纏ったまま私を救出しに来ていたに違いない

姉さんつてば普段は冷静沈着の癖に家族が絡むと激情家になるんだよなあ、まあそこが姉さんの良い所であり悪い所つてやつかな？

「束さん、改めて今日は色々ありがとうございます」

ニコニコしながらマドカの寝顔を眺めていた束さんに改めてお礼を言うよ

「どういたしまして、いちちゃんの性格的に気にしないで？ つて言っても気にするだろうから貸し1つて事で、良いよね？」

私の方を向かずにスヨスヨ寝ているマドカの頬を人差し指でムニムニしながら束さんは言う

「分かった、貸し1で。なんでも、とは言えないけど可能性な範囲で答えられる様にするよ」

私は束さんの言葉に頷き言う、両親は私が産まれる ずっと前から束さんを知っているし、私と束さんが こんな風なやり取りをするのも何度も見ているから何も言わない

さて、通算何個めの貸しになるんだろう？ 消化してれば1個だけ

仮

誘拐された翌日から事情聴取やら怪我の治療やら安全確保やら、なんやらがあつて予定より少し遅れて自宅へ帰つて来れた

私は自室のベッドに倒れ込み天井を見上げて溜息を吐く、少々色々あり過ぎて疲れてしまった

誘拐なんてされたの初めてだし、激おこ の姉さんは怖かつたし、右手は痛いし、ほんと色々と疲れた

なんか姉さんは私が誘拐された事を伝えるのが遅かつたとかなんとかで、日本政府に不信感を持つて現役引退するつて言い出して、2連覇祝勝の記者会見で引退宣言して、後進を育てる為に教育者を目指すとか言つてたな

東さんは東さんで姉さんが日本代表を辞めるなら自分もつて言つて首席整備士を辞職して自分の会社起すとか起こさないとか何とか

まあ姉さんと東さんが居なくなつて日本政府は大慌てだろうけど、私の預かり知らぬ所だから知らね

「よし、行くか」

ベッドから起き上がり立って伸びをして少し気合いを入れてドイツで購入した お土産の入った紙袋を左手に持ち部屋を出てリビングの扉だけ開けて

「道場に お土産持つて行つてくる」

ソファアールで寛いでいた両親へ言い返事を半分聞き流し靴を履いて自宅を後にする

道すがら包帯の巻かれた自分の右手を見て、もう1週間は稽古できねーなーとか、その事を先生に伝えなきや行けないなあとか考えながら のんびり歩いて鳥居をくぐり境内に入り社務所へ歩み

「先生、本日戻りました」

社務所の中で作業をしていた先生・・・篠ノ之 柳韻へ軽く頭を下げて挨拶をする

「おかえりー夏君、大変だったみたいだね？」

作業を一旦中断し、社務所から出てきて少し苦笑して先生は言う

「はは・・・まあ、それなりに」

私が誘拐された事も多分ニュースになってるけど、突然姉さんが現役引退したってニュースの方が多分 大々的に広まってるみたいだ、うん

「ま、まあそれはそれとして、これドイツのお土産です。あと右手がコレなんで向こう1週間は剣が握れそうに有りません、正確な日数は医者と相談ですかね」

ドイツの お土産を先生に渡し、右手を見せて説明すると

「お土産ありがとう、右手の件は分かったよ、ひとまずは右手に負担にならない鍛錬をする事にしようか。とはいえ次の練習日からになるだろうけどね？」

と先生は穏和な笑みを浮かべ言う

篠ノ之柳韻と言う人は、厳格な人だ規律と礼儀を重んじ不正を嫌う人

子供を叱る時には怒鳴りつける事はなく、何故ダメなのかを一つ一つ丁寧に子供が分かるように、理解出来るように諭す

私が尊敬する大人の1人だ

私の人生の目標の1つが先生の様な優しく強い人になる事だった
りする

そんなこんな話をしていると

「ただいま お父さん、あれ？ いーちゃん も居るね？ まあ良い
か、とりあえずただいま」

後ろから束さんが現れて声を掛けてきた、まあ此処は束さんの実家
だから束さんが此処に現れてもおかしくない、おかしくないんだ
が・・・少し不安顔の銀髪美少女を伴っている事が気になる

「おかえり束、珍しいね？ 君が帰ってくるなんて」

「ちーちゃんが現役引退しちゃったし私はちーちゃんが纏うIS以外
は触る気も無かったからね、三行半叩きつけてきたんだ。それに夢も
まだ見ていたいし」

先生の言葉に束さんは答えて空を見上げて言う、今でこそISはス
ポーツに使用されているが、元々は宇宙進出をする為の翼だと束さん
は言っていた

束さんもまだ若いし、夢を追いかけていたいのだろう

「まあ私の夢は置いておくとして、お父さんにお問い合わせがあるんだ」

空を見上げていた束さんは珍しく真剣な表情をして先生を見てい
う

「その子の面倒を見て欲しいのだろうか？ 構わないよ、部屋なら余っ
てるし、それに君のお陰で家計に余裕があるからね」

「うん、ありがとう。くーちゃん がウチに慣れるまでは家にいるつ
もり」

相変わらず先生の凄さに舌を巻きつつ、この父娘はとんでもないな、と思う

「私は織斑 一夏、よろしく」

私より少し背の低い銀髪美少女に挨拶をすると

「クロエ・クロニクル、です」

少し小さな声でクロエは挨拶を返してくる、なるほどクロエだからくーちゃん なのか

「こんにちは、私は篠ノ之神社 神主 篠ノ之 柳韻、東の父でもあります。今日から君を家族として迎えるから何かあったら頼って欲しい、東のお陰で子供があと10人増えても余裕があり過ぎるぐらい家計が潤っているから遠慮はしなくて大丈夫だよ」

と先生は微笑みクロエに言う、まあクロエ本人は困惑顔をしているから どう反応したら良いか分からないのだろう

とはいえ先生の言葉は真実だろう、なんたってISの産みの親でありISコアを唯一製造出来るのが束さんだ

そのコアのレンタル代だけでも相当な額が束さんの口座に振り込まれているだろうし、束さんの口座から毎月 篠ノ之の家計にどれぐらいのお金が動かされているのか、計り知れない

ま、束さん程じゃないけど姉さんも高給取りなんだけどね？うん

「ははは、困惑するのも分かるけど時期に慣れる、とりあえず仲良くしようぜ？ クロエ。あ、私の事は一夏で構わないから」

「は、はい。よろしくお願いします一夏」

クロエって少し大人しいタイプみたいで、少し距離を詰めるの速すぎたかも知れない、とほんの少しだけ反省し、クロエと仲良くなる事に決めた